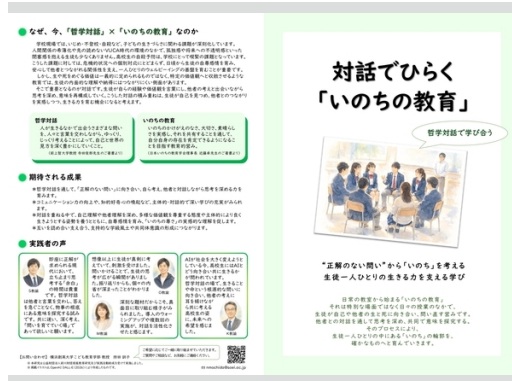


2025年度 研究成果報告書

所属機関名	学校法人堀井学園 横浜創英大学
申請者氏名	持田 訓子
研究課題名	哲学対話を活用した「いのちの教育」授業プログラムの開発と実践的検討



教員向けリーフレット(p1)



教員向けリーフレット(p2)

【研究の概要】

近年、高校生の自殺が深刻な社会課題となるなか、子どもの主観的ウェルビーイングを支える「いのちの教育」の充実が求められている。本研究は、哲学対話および「いのちの教育」に関する理論的検討と、高校で実施した試行的実践の成果を基盤として、哲学対話を活用した「いのちの教育」授業プログラムを開発し、その有用性と課題を検証することを目的とする。

試行では、参加生徒への事前事後アンケートおよび対話記録の分析を通して、対話による気づきや変容に関する知見を蓄積しており、これらの成果と先行研究を踏まえて、教育的妥当性と実現可能性を備えた授業プログラムを構築する。開発したプログラムを高校の正課の授業において教員が実践し、その実践を対象として、生徒の振り返りシート分析および教員への半構造化インタビューを行い、教育効果や実施上の課題を検討する。これらを総合的に考察し、高校における授業実践モデルを提示するとともに、教員向けリーフレットの作成や研修会の実施、学会発表等を通じて、多様な教育現場への普及・展開を目指す。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

本研究は、哲学対話および「いのちの教育」に関する理論的検討と高校での試行的実践を踏まえ、哲学対話を活用した「いのちの教育」授業プログラムを開発し、その有用性と課題を検証することを目的とした。また、カリキュラムや指導法が未整備であるため組織的・継続的な実施が難しい現状に対し、本研究において一つの実践モデルを提示し、多様な教育現場での普及と展開に資することを目指した。

具体的には、試行を基に「いのちについて考える哲学対話」の学習指導案を作成し、研究協力校に提示したうえで、高校1年生の総合的な探究の時間および2年生の公共の授業において、教科担当者による2時間1セットの授業を実施した。授業後に、同意の得られた生徒の振り返りシートを収集し、記述内容を定量的・定性的に分析した。

その結果、生徒は哲学対話を通して主体的に問いに向き合い、多様な視点から思考を深めていたことが明らかとなった。「自分だったらどうだろうと考えて学びを深めることができた」「普段なら考えないことを考えられてよかった」といった記述から、根源的な問いに触れる経験が新鮮で意義深いものであったことが示された。また、「人によって意見が違って驚いた」「他の人の意見を聞いて自分の考えが広がった」など、対話を通じた他者理解の広がりも確認された。「自分の生き方を見直すきっかけになった」といった記述からは、内省や自己理解の深まりがうかがえ、哲学対話が内面的成長を促す場として機能していたと捉えられた。

一方で、実践上の課題も明らかになった。教員へのインタビューでは、学年間の差異が指摘され、1年生は心理的安全性が十分でなく対話への抵抗が見られたのに対し、2年生では成熟した姿勢で深い対話が可能であった。また、授業枠組みの違いも生徒の参加姿勢に影響し、公共のように評価が伴う科目では安定した取り組みが期待できる一方、総合的な探究の時間では教員の力量差が表れやすいことが共有された。「死」などのデリケートな題材については心理的配慮が不可欠であるものの、適切な支援があれば「向き合う良い機会になる」と肯定的に捉える意見もあった。また、公共や総合的な探究の時間との親和性に加え、保健、家庭科、理科、国語、特別活動など他教科での実施可能性も示唆された。外部講師ではなく日常的に生徒と関わる教員が実施することは、個別の事情への配慮や継続的な変容の把握を可能にし、学校教育に根づく実践として重要であると捉えられた。教員のファシリテーションスキルの個人差は課題であるが、哲学対話は教科横断的に実施可能な汎用性の高い手法であり、教員自身の省察や専門性向上にも寄与する点が確認された。

以上より、本プログラムは生徒の思考の深化、他者理解の促進、内面的成長を支える教育的効果を有し、「いのち」をめぐる学びを学校教育に根づかせる上で有用であると結論づけられた。一方で、心理的配慮や教員のファシリテーションスキルへの支援など、実践上の課題も明らかとなった。これらの知見は、年間を通じたプログラムの構築や長期的な教育効果の検証など、今後の研究・実践を発展させるための重要な示唆を与えるものとなった。

なお、本研究の成果物として、授業の基本構成や留意点、期待される成果などをまとめた教員向けリーフレット「対話でひらく『いのちの教育』－哲学対話で学び合う－」を作成した。

2. 今後の研究の見通し

本研究で開発した「哲学対話を活用した『いのちの教育』」授業プログラムは、子どもが主体的に「いのち」について考え、多様な価値観に触れながら自己理解・他者理解を深めるなど、一人ひとりの生きる力を支える教育実践モデルとして、今後の学校教育に広く応用可能である。本研究では、生徒の思考の深化や内省の促進、他者理解の広がりなど一定の教育的効果が確認されるとともに、学年間による対話への参加姿勢の違いや、心理的安全性への配慮、教員のファシリテーションスキルなど、実践上の課題も明らかとなった。今後は、これらの成果と課題を踏まえ、授業内容や進め方、教員への支援方法等について継続的な改善を図り、学校現場で実施しやすい授業プログラムとしてさらに洗練させていく。

また、本研究で作成したリーフレット「対話でひらく『いのちの教育』－哲学対話で学び合う－」を活用し、教育委員会や学校への配付、授業のデモンストレーション、教員研修会等を通じて普及を図る。特に、自由度の高い哲学対話や「いのち」というデリケートな題材を扱う実践経験の少ない教員でも、安心して授業を実施できるよう、ファシリテーションの基本的な考え方や授業運営上の留意点、心理的安全性を確保するための配慮事項などを整理するなど、授業支援の充実を図る予定である。そうすることで、教師の専門性向上にも寄与したいと考える。

加えて、高校での実践成果を基盤としながら、小学校・中学校・特別支援学校など他校種への展開も視野に入れ、発達段階や教育課程の特性に応じた授業プログラムの開発を進める。本実践において、総合的な探究の時間や公共との親和性が確認された一方で、保健、家庭科、国語、理科、特別活動など教科横断的な活用可能性も示唆された。今後は、各教科の学習目標との関連を整理し、それぞれの教育活動の中で活用できる授業モデルを検討することで、「いのちの教育」を学校全体で推進する教育実践へと発展させたい。また、単発の授業にとどまらず、年間を通じた系統的なカリキュラムとして位置付けられるよう、実践と検証を重ねていく。あわせて、継続的な実践を通して、生徒の思考の変容や自己理解・他者理解、主観的ウェルビーイングへの影響を長期的な視点から検討するとともに、授業での学びが日常的な行動や生き方へどのようにつながるのかについても明らかにしていく。また、学校現場との協働を継続し、実践と省察を重ねながら現場のニーズに即した授業改善を進めることで、持続可能な教育実践モデルとしての有効性をさらに高めていきたい。

あわせて、実践の蓄積を基に研究成果を学会発表や学術論文として公表するとともに、教育学のみならず心理学、福祉学、哲学など関連分野との学際的な議論を深めることで、「いのちの教育」の理論的基盤の充実にも貢献したい。哲学対話を活用した「いのちの教育」が、子どもの主観的ウェルビーイングの向上や自殺予防を支える発達支持的な教育実践の一つとして学校教育に定着し、現代社会が抱える教育課題の解決と持続可能な社会の実現に寄与することを期待している。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

【学会発表】

- ・日本学校心理学会 第27回大会（2025年12月）ポスター発表 抄録集p106
「『いのちの教育』の実践をめぐる文献的考察－成果と課題に着目して－」
- ・日本いのちの教育学会 第27回研究大会（2026年2月）ポスター発表 抄録集p16
「対話でひらく『いのちの教育』－高校生の振り返りシートにみる授業実践の意義－」

【論文】

- ・持田訓子（2026）「いのちの教育」の実践をめぐる文献的考察－成果と課題の構造的把握－．いのちの教育, 第11巻第1号, pp.62 - 73.
- ・持田訓子（2027掲載予定）哲学対話による「いのちの教育」の試み－高等学校における総合的な探究の時間と公共の実践から－, 思想と対話, 第9号.

【刊行物】

- ・リーフレット「対話でひらく『いのちの教育』－哲学対話で学び合う－」（2026年6月発行）